ヤスクニ通信　No.232　2019 年 1 月 18 日
発行　靖国神社国営化反対福音主義キリスト者の集い（略称「つどい」）　代表・西川重則　TEL/FAX　042-574-9210
事務局　西東京市柳沢 2-11-13 西武柳沢キリスト教会気付　HP　http://yasukuninotsudoi.christian.jp/
例会　毎月第3金曜日　7:00～9:00pm（祝日の場合第 4 金曜日）
会場　たんぽぽ舎 TEL 03-3238-9035　FAX 03-3238-0797

ヤスクニ・レポ　232
2020 年を前に、2019 年にあって考えるべきこと
代表　西川重則

1

戦後七四年の二〇一九年にあって、私は毎月のように講演又は歴史の事実に基づく報告を依頼されているが、戦前・戦中・戦後の総括にかかわる諸問題もあり、どの場合も正確な歴史的事実を学んでいなければならない。

たとえば、日中戦争直前の 1936 年 2 月 26 日に日本陸軍によって起こされた出来事であるが、ここでは結論だけしか報告できないが、岩波ブックレットシリーズ昭和史『二・二六事件』の著者須崎慎一さんが最後のまとめの所で、次のように報告され、私たちに今後の課題を考えさせている。

「二・二六事件――それは、大規模な侵略戦争の開始へと、時計の針を大きくすすませ、日本国民に無謀な戦争を強要したのみならず、近隣諸国民に言語を絶する被害をあたえる第一歩となったのである」(61 頁)。

このまとめの言葉は文字通り、歴史の真実を予告しているのであり、翌年の 1937 年 7 月 7 日に、中国の盧溝橋で日本と中国とが日中戦争を始めることになったのであり、私自身もその場に直接行き、歴史的事実を確認したものである。

ここでは重大な歴史的事実について述べることはできないが、中国では、日本による日中戦争の開始を断言され、中国では抗日戦争と言われている。北京大学が近い場所にあり、私自身、北京大学で日本の現状について講演を依頼され、時間を作って、日中戦争の原点の場所に行ってきたが、いずれにしても戦争は予期しない場合に起こるものであり、北京大学の学生が、見事に抗日戦争と名づけて戦争を重大視していたことを私は忘れることができないで帰国したものである。

その後、1937 年 12 月 13 日、日本軍が当時の南京占領による南京大虐殺事件を起こし、戦後７４年の今日も、南京大虐殺をめぐって、その真実が日本では問われている。

南京大虐殺という言い方は、日本ではその真実をめぐって、今もなお問題視されている。中国にとっては、南京大虐殺は自明のことと言われているが、日本では南京大虐殺などはあり得ないことだと断言している有識者も多くおられ、その真実をめぐって未解決とされている。岩波新書で、『南京事件』の著者笠原一九司さんが一般の人々の問いに答えておられる。岩波新書の最初のところで次のように書かれている貴重な発言である。

「南京事件」

日中戦争において、日本は当時の中国の首都、南京を激戦のすえ攻略した。このときに発生した、いわゆる「南京大虐殺」は重大な戦争犯罪として、いまも論議の的になっている。……著者は、攻略戦の発端から説きおこし、……その全体像を描き出していく。

なお以上のように、歴史的に真実をめぐって戦後７４年の今も問題視されている他の事例をも挙げてみたい。

2

沖縄の戦後史にあって歴代政府が沖縄のこころを無視して政治的に解決しようとしているが、率直に言って、それは空しい試みに過ぎない。以下私が尊敬してやまない大田昌秀沖縄県知事が生前に、すばらしい以下のような発言をされていたことを述べておきたい。

「理念の目指すところは……戦争や基地のない平和な社会をつくることにあります。……沖縄戦の実相と平和の尊さを世界の人々に正しく伝えることとともに、真の平和をこの地上に確立しようとするものであります。……そして昔からの武器のない、文字どおり近隣諸国と友好関係を結ぶことによってしか沖縄の特色は出せない、そこにし

か沖縄の生きる道はないという声が私にはいつも聞えるのです」(西川重則著『平和を創(つく)り出すために』、166、167 頁、参照。いのちのことば社発行)。

なお大田県政によって沖縄の「平和のこころ」を具象化したのが「平和の礎(いしじ)」(1995 年 6 月 23 日に除幕)であることは広く知られている。私も当日、沖縄に行き、大田県知事に直接会って心から感謝して帰ってきた。安倍内閣が現在政治的に沖縄問題を理解しようとしているが、そのような政治的発想による理解がいかに道ならぬ道による理解の仕方であるか、大田県政による先程述べた「戦争や基地のない社会をつくることにあります」という沖縄のこころを無視した政治的発想を私は徹底的に批判して止まない。沖縄のこころを全然理解することのない安倍内閣を徹底的に問いたいと思っていることを、声を大にして、ここで警告しておきたい。

なおもう一つ、沖縄のこころをはっきりと表現している以下の文を改めて記して、皆さんに強調しておきたいと願っている。以下の通りである。

沖縄戦の実相にふれるたびに
戦争というものは
これほど残忍で　これほど汚辱にまみれたものは
ない
と思うのです

このなまなましい体験の前では
いかなる人でも
戦争を肯定し美化することは　できないはずです

戦争をおこすのは　たしかに　人間です
しかし　それ以上に
戦争を許さない努力のできるのも
私たち　人間　ではないでしょうか

戦後このかた　私たちは
あらゆる戦争を憎み
平和な島を建設せねば　と思いつづけてきました

これが
あまりにも大きすぎた代償を払って得た
ゆずることのできない
私たちの信条なのです

(『平和への証言　沖縄県立平和祈念資料館ガイドブック』134、135 頁参照) (2019 年 1 月 14 日)

２０１８年１２月２１日例会奨励「捕虜として捕らわれて行く」
第一列王記８章４１－５０節　　山川　暁牧師（単立鶴川キリスト教会）

ソロモンはエルサレムに神殿を建てた。その奉献式で祈った祈りに「あなたの民が敵との戦いのために出て行くとき」と祈っている。「あなたの民」とは、単にイスラエルの民だけではなく、地上に生きているすべての民を意味している。

ソロモンはさらに祈っている。「罪に陥らない人は一人もいません」と。さらにこう祈っている。「遠くであれ近くであれ敵国に捕虜として捕らわれて行き」と。

７７年前の１２月、日本は米英に宣戦布告し、アジア太平洋戦争に突入した。この宣戦布告によって、一人の神学生、中田善秋がフイリピン戦に宣撫工作員として動員された。敗戦を迎えたとき、中田は住民を虐殺した容疑で戦犯として裁かれる。虐殺とは無関係であったにもかかわらず、中田は有罪とされ、スガモプリズンに移送される。

中田はスガモプリズンで戦犯に熱心に福音を語り、伝道した。中田はソロモンが祈ったように「私たちは罪ある者です。不義をなし、悪を行ないました」と戦争罪責を告白している。だが、スガモプリズンの外にある教会はどうであったか。戦争責任に目を向けようとしていたのか。

１９５２年、中田はスガモプリズンから釈放される。だが、中田は牧師にはならなかった。何故なのか。戦争責任に目を向けようとしない教会に絶望したためなのか。ソロモンの祈りは、戦争に加担したしたことの罪を告白し、その罪の赦しを求めることの大切さを教えてくれている。戦犯として裁かれた無名の神学生もまた、そのことを教えてくれている。